# 持続可能な都市再生とは何か

＊　文中敬称を省略します。

都市研究センター　副所長兼研究理事
渡　辺　直　行

## はじめに

今回の特集は「持続可能な都市再生に向けて」である。「持続可能な都市再生」と言えば、都市の生態系をいかに回復するか、都市のエネルギーをいかに循環させるか、都市の省エネルギーをいかに進めるか、といったような話に普通はなる。したがって、本誌にはそのようなことはほとんど書かれていない。

今回の特集の趣旨を強いて述べれば、「持続可能な都市再生」実現のために非常に重要であるにも関わらず日ごろ見落とされがちな事柄にスポットを当てるということである。一方、それぞれが自由に書いた文章をあとでまとめたら「持続可能な都市再生」になった、という見方ももちろん可能である。それは、トップダウンで方針や計画を決めるのではなくボトムアップで形をつくっていくべきであるという新しいまちづくりの考え方によるものではないが、結果としてその意義を示すものとなった。本稿ではそのあたりを序論として述べておきたい。

## 1. 疲れる再生

最近の都市は昔に比べれば相当ユートピア的になったと思うが、そのような都市における「持続可能な都市再生」とは一体何を意味するのであろうか。都市づくりの方向を大きく誤らないためにも、まずはそれをじっくりと考えることが必要である。

「持続可能な都市再生」とは、「都市再生」を超えた何かである。ただ「都市再生」するだけでは不十分である。「再生」とは「生きかえること」「生まれかわること」といったような意味であるから、「持続可能な」が付けられないただの「都市再生」、すなわち「持続可能でない都市再生」とは、完成図が実現されたことをもって終わる「都市再生」である。それに対して「持続可能な都市再生」とは、何度も何度も繰り返し生まれ変わる再生である。イメージとしてはものすごく丈夫なリサイクルビンのようなものである。その本質は、回り続けることである。回り続けるのであるから、完成図はない。

もちろん「都市再生」の「再生」はただ回っているだけではない。都市とはそこにあり続けるものであるから、姿が変わらないようでは「再生」にならない。少し変わるのもわざわざ「再生」とは言いにくい。「再生」と言うからには大きく変化しなければならない。そのような意味での「再生」を前提にすると、それは、イメージとしては、ガラスのビンをリサイクルしていたら黄金のビンになってしまいました、というような「わらしべ長者」のような変化である。しかし黄金になってもそれで終わらないのが「持続可能な都市再生」である。次は何かが大きく変わらなければならない。例えば去年の毛虫が今年は蛹になり来年は蝶になります、というようなものが「持続可能な都市再生」である。それで蝶になった後はどうする

んだと言われて仕方がないから踊りでも習おうかなということになって踊り疲れて黄金のビンにぶつかって昏倒してお仕舞いになる可能性があるのも上記の意味での「持続可能な都市再生」である。

**2. 動と静**

そういう状態は結局「持続可能ではないかもしれない都市再生」である。解釈にもよるが、これはある種の資本主義的再生である。あるいは近代西洋的再生である。時間概念すらない東洋の世界ではビックリする。とは言っても東洋の世界は西洋のユートピアのような固定した世界ではない。そこには「輪廻」がある。動かないようでも動いている。それを改めて「再生」ととらえるならば、それこそが「持続可能な都市再生」であるかもしれない。「再生」のこのような解釈にこそ東洋と西洋とを調和させる鍵があるようにも思われる。

いずれにしても、「持続可能な都市再生」という動的イメージは化石都市の静的イメージとは正反対のものである。そこには完成図などはなく、再生に取り組むプロセスだけがある。完成などという概念すらない。だから、わかりやすく単純なコンセプトの下で地図の上に路地があろうが町家があろうがズバッと線を引いて、とにかくそれをつくって「完成」してめでたしめでたし、ということにはならない。

近代の都市計画が西洋の保守的な人や地域において特に発展したということであれば、その理由が何となくわかるような気もする。例えばオースマンのパリ大改造計画やバーナムのシカゴ計画、ルドゥーの理想都市、フーリエの何とかいう宮殿の計画などがあるが、これらは変革を謳っているものですら極めて保守的、あるいは共産主義的であると言う（「持続可能な再生」の観点から見れば両者はある意味で似ているのかもしれない）。そして、それらの原点にトマス・モアの「ユートピア」があるという話もどこかで聞いたような気がするが、もしそうであるならば、それらの基調にはカソリック的性格や共産主義的性格があるのかもしれない。都市計画の教科書などを見ると、ほとんどのものはもっと後の時代の計画を近代都市計画の原点であるとしているが、そのような認識では近代都市計画の本質は理解できない、などという大胆な素人考えで次にトマス・モアの『ユートピア』を参照してみたい。

**3. ユートピアの「正しい」生活**

モアによれば、ユートピア島には54もの都市があるのだが、それらは「すべての点で同じように作られている」（平井正穂訳、岩波文庫、1957 年、以下同じ）。したがって、「ユートピアの都市については、もしその一つを知れば、全部を知ったも同然であるといわれる」。何だか戦後日本の近代都市のようだが、どれでも同じということで以下「アモーロート市」に関して話が展開される。

アモーロート市に関しては最初にハードの説明があるが、それは都市の本質の理解には関係ないのでここでは省略する。この市では、私有の財産というものがない。「家の内には私有のもの、つまり誰々個人のものといったものがない」という状態で、「家そのものは十年ごとに抽選によって取換えることになっている」。どうやら極めて公平な公営住宅であるらしい。また、庭仕事は「一種の競争」により「各人それぞれの分担をきめて行われる」。勤勉な人たちである。このような都市を誰がつくったのかと言えば、「ユートパス

王自身がまず最初に都市計画の原案をたて、ちょうど現在のような形にした」ということであり、要するにトップダウンでつくったのである。

この都市には家族長なるものがいるのであるが、その「殆んど唯一の任務」は「怠けてぶらぶらすごす人間が一人もいないように、・・・働いて疲れてしまうことのないようにと、注意し監督することである」。近代の工場のような都市である。生活時間にも細かな規則がある。「午前中三時間の労働、正午には直ちに昼食、食後は二時間の休憩、その後で再び三時間の労働、次に夕食」となっている。近代の刑務所のようである。「直ちに昼食」というのは戦後の学校給食のようでもある。食事に関しては次のような説明が続く。

> どの街路にもそれぞれいくつかの大きな会館が一定の距離のもとに建てられている。(中略) 昼食と夕食のきまった時刻には、真鍮の喇叭 (らっぱ) を合図に全区民がそれぞれの会館に集まる。しかし、会館にたいする食事の分配が終った後で、市場から食べものを自宅に持ちかえることは別に禁じられてはいない。なぜなら正当な理由もないのにそういうことをする人間は一人もいないことを彼らは知っているからである。禁じられてもいないのに誰も自宅で食事をとらないというのは、それがかなり不作法な行為とみなされているからである。(中略) 会館では、汚い仕事や賤しい仕事や辛い仕事などは、そのほかの骨のおれる雑役とともに、すべて奴隷がすることになっている。

「彼らは知っているからである」というのは何となく恐ろしい響きを持っているが、自宅で食事をすることが「かなり不作法な行為」であるとは実に驚きである。さらに驚くのは、ユートピアに奴隷がいることである。この奴隷にはいろいろな種類があることが後に言い訳のように説明されるが、奴隷は奴隷である。要するに、ユートピアとは一部の人々にとってのユートピアであり、それは大勢の奴隷によって支えられている。それで六時間労働であるにも関わらず市民はかなり豊かである。ユートピアには「すべての物資が豊富に」あり、「けっしてものに不自由することはないという安心感」がある。「ご馳走の後にはきまって美しい意匠をこらした菓子だの糖菓だのがでる」。

市民は「空いている時間、つまり、労働・睡眠・食事などの合間の時間は各人が好きなようにつかっていい」となっている。市民は楽なものである、と思ったら、「ぶらぶらすごしてよいという意味ではない」とその後に書いてある。「有益な知識の習得にこの貴重な時間を最も有効に用いるようにとの意味なのである」。どうしてそういう意味になるのかは不明であるが、そこでは「毎日朝早く講義が行われることになっている」。今の小中高生はこれに類する生活を送っている。高校生も補修を受けなければ単位すらまともに取れない。

この調子では夕食後も「講義」なのであろう、と思ったらそれは「団欒の時」であり、そこでは「ゲーム」もできるというのでほっと一安心、などと思ったら大間違いであり、ゲームの内容は「算数合戦」なのである。ゲームはもうひとつある。それは「善は悪の猛威に抵抗し、これを撃破することができるか」というゲームである。既に聞き慣れてしまった話ではある。

こうして人々の一日は安息のうちに終わるわけであるが、そのような社会における人々の生きがいは次のようなものである。

この国家の制度においては、まず考慮され、求められている唯一の主な目的は、公共生活に必要な職業と仕事から少しでも割きうる余暇があれば、市民はそのすべての時間を肉体的な奉仕から精神の自由な活動と教養にあてなければならないということである。人生の幸福がまさにこの点にあることを彼らは信じているからである。

たとえそうであったとしてもユートピア市民も人である以上どこかで羽目をはずすのであろう、と思えば「誰でもすぐに家族長や主族長の旅行許可証をうることができる」となっているのでどうやらお伊勢参りのようなことがあるらしい、と思ったら大間違いである。この旅行は監視されているらしいのである。そして、羽目をはずしたりすると「厳重に処罰される」のであり、それを再度行うと「今度は罰として奴隷にされてしまう」のである。「こういうわけで、いかに彼らにぶらぶらと時間を空費する自由が許されていないか、また怠ける口実や言訳があたえられていないか、ということがお分かりになったと思う」と書かれている。ということは、やはり人々は時間を空費したいと思ったり怠けたいと思ったりするに違いないのである。人々が勤勉なのは「人生の幸福がまさにこの点にあることを彼らは信じているからである」と先に書かれていたのは何だったのだろうか。

これで次第にユートピアの正体が見えてきたわけであるが、そのようなユートピアが維持されているのは「すぐれた教養と学問の力」によるものである。やはり問題の根幹は「教養と学問」にある。こういうものがコンセプトを蔓延させて、それが人々の生活を規定してしまう。上からのコンセプトで人々の生活を統制するようになってしまう。それは次の戦争論にも表れている。

自分の国を守るためか、友邦に侵入してきた敵軍を撃退するためか、圧政に苦しめられている友邦国民を武力に訴えてでも、その虐政の桎梏から解放してやるためか、そのいずれかでない限り戦争をするということはない。そして、彼らがそういうことをするのも、実に彼らの純粋一徹な同情の念のしからしめるところにほかならないのである。なお彼らが友邦に援軍を派遣するのは、何も必ずしもその国を守ってやるためばかりでなく、時にはその友邦が受けたいろいろな不法行為に対する報復のためのこともある。

どうも怪しいと思っていたら、やはり報復のための戦争をするのである。そして、その戦争の決断には次の要素が働く。

彼らはたとえ勝利をうることができても、それが多くの流血を伴ったものであれば、単にそれを後悔するだけでなく、むしろ恥辱とさえ考える。あまりに高い代価を払って戦捷をかちえても、それは愚の骨頂というものだと考えるのである。

これではまるで遠くから攻撃する現代の戦争である。そうしないと後で「愚の骨頂」と評価されてしまう。このような価値観を持つユートピアの人々の精神を支えるものは何か。それはやはり宗教である。ユートピアには太陽、月、他の星など様々なものを神として崇める者がいないこともないが、実態は以下のようである。

国民の大半を占める、ものの分った人たちはこれらの宗教をすべて排撃しており、こ

の世界には、知られざる、永遠の、理解を絶し、説明を絶し、人間の智慧の能力と限界をはるかに超えた、ある一つの神的な力がその大きさによってでなく、その善と力によって遍く存在していることを信じている。これを万物の父と彼らは呼んでいる。そしてあらゆるものの創造・生成・発達・変化・死滅はただこの神の働きによるものとしている。

このようなユートピアに「持続可能な都市再生」などは必要ないであろう。全ての市民の行動はあらかじめ決められており、それに従うことに市民は幸福を感じており、もし幸福を感じない市民が万が一いるとすれば、彼らは多分奴隷にされてしまうのである。そのような現実の下で幸福だと思っている者は「持続可能な都市再生」とは無縁である。

**4. 死と生**

「ユートピア」は、現代から見ればとても誇張した存在であるような、ないような、実に不可思議な社会であるが、いずれにしても「持続可能な都市再生」を求める社会とは多くの点で対極に位置する。崇高な志と自己犠牲の精神とを持ったトマス・モアがどのような趣旨でこのような社会を描いたのかは不明であるが、イギリスではなく大陸でまず出版した背景にはイギリス社会の「変化」があったものと思われ、その「変化」がさまざまな問題を引き起こすようになったことから近代都市計画が生まれたとするならば、「ユートピア」と近代都市計画とは同じ側に位置する。

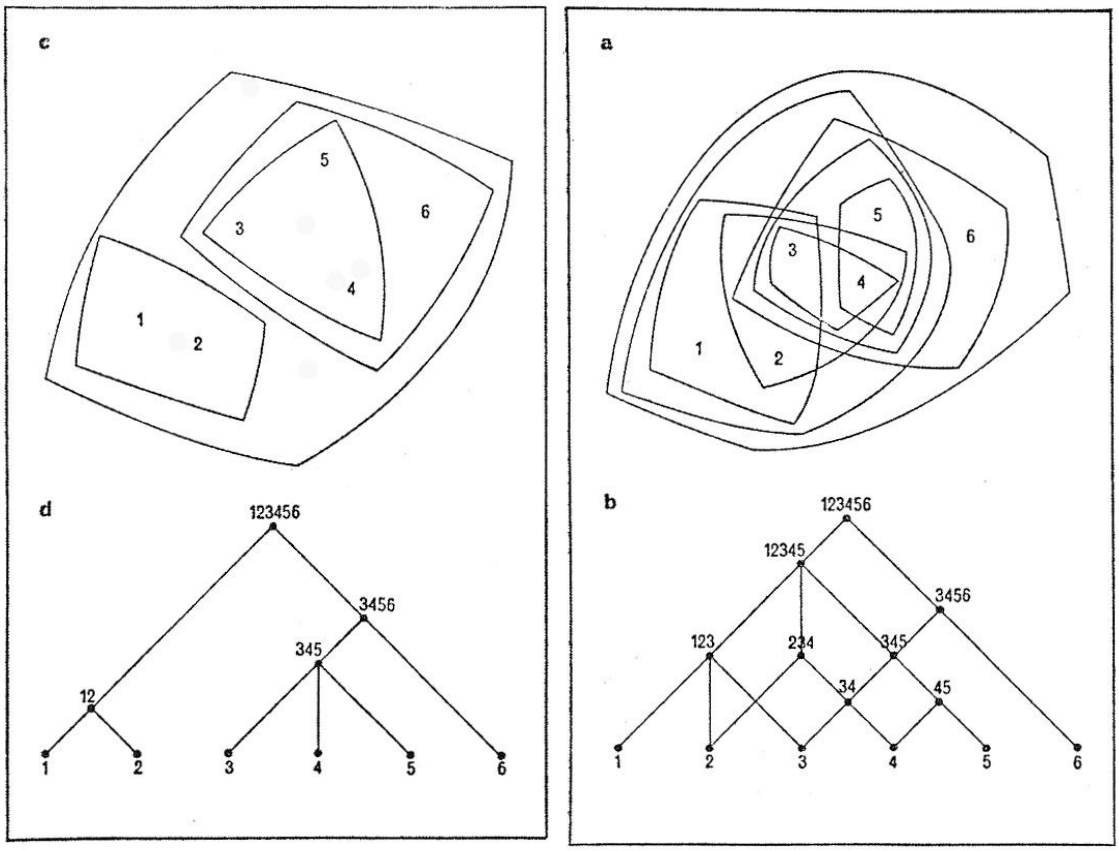
「ユートピア」をひとつの源流としつつ様々な工夫が加わって都市計画のシステムが洗練され、それは静的世界観を持つ国や地域ではそれなりにはうまくいったものの、動的世界観を持つ国や地域ではそうでもなかった、ということが仮に言えるとするならば、その原因は都市計画が一種の「静止した形」「完成した形」「理想的な形」「永遠の形」を扱うところにある。これらはつまり「コンセプト」である。そうであるならば、現実の生態系（人間の社会構造を含む）をうまく組み立てるためにはそれを超えた新たな工夫が必要になる。

この点を考察する上で参考になるのが、アレグザンダーのパタンランゲージである。アレグザンダーが「都市はツリーではなくセミラティスである」と言ったことは都市関係者の間では周知の事実であるが、その考えに基づくアレグザンダーの試みは、磯崎新によれば、「ほとんど失敗だった」。その理由は、「要するに建築家がやればすべてツリーにしかならない」ということであり、「建築家がやらないと、逆に都市は自動的にセミラティスになる」ということである（山本理顕編『私たちが住みたい都市』平凡社、2006 年）。上から見下ろして計画すればどうしてもツリーになってしまう。これは天の一点を頂点とするトップダウンの綺麗なヒエラルキーの理念の世界である。しかしそうなってしまうと、送電線が一箇所切れただけで大停電が発生するなどということにもなってしまう。一方、草の根的にまちづくりを展開すれば自動的にセミラティスになるということならば、それは「持続可能な都市再生」を実現するための必須の条件になる。

ちなみに、アレグザンダーの「都市はツリーではない」を元に描かれたツリーとセミラティスの例（山本前掲書掲載図を一部修正）を下に引用する（他の例は“A City Is Not A Tree”のホームページに掲載されているので興味のある方は参照されたい。URL は http://www.arq.ufmg.br/rcesar/alex/alexander

/alexander1.html)）。都市計画の専門家はやはりツリーの方を見慣れているであろう。頭で考えて都市の姿を描くと、どうしてもツリーになってしまう。都市の骨格や都市施設の配置など、ツリーになってしまっている例は数多い。それらはもちろん効率性重視の設計によるものではあるが、その効率性は機能発揮のための効率性である。それで実際にまちの中を歩いてみると、似たような施設が一定間隔で出現したりして随分と無味乾燥なまちになっている。散歩していても楽しくないわけである。頭の中で計画してそれを図面に落とす制度論ではどうしてもそうなってしまう。人々が草の根的に活動した結果としての絵はそうはならない。これは、まちの外から見てモノをつくる立場の論理と、まちの中で生活する立場の感性との相違であろう。

**ツリー構造とセミラティス構造**




ツリー構造　　セミラティス構造

(資料) 山本理顕編『私たちが住みたい都市』平凡社、2006 年

もちろん、特定の計画者が絵を描く場合でもセミラティスになることはあり得なくはない。ただし、それは絵画で言えば、ジャクソン・ポロックのドリッピングのような手法によるものであろう（セミラティスを見ているとドリッピングを連想する）。もっともポロックの手法はオールオーバーでありアクションペインティングであるから、それはもはやポイントに焦点を絞って机上で作成する「計画」ではない。しかし、ポロックは「全体の統制・・・偶然の否定・・・

秩序正しさ･･･有機的な強烈さ･･･エネルギーと運動･･･が空間に捉えられた記憶を可視的なものにした･･･」とメモに残しているのであるから（レオンハルト･エマリング『ジャクソン･ポロック』（TASCHEN、2006 年）、それは「計画」をはるかに凌駕した高い次元の調和を表しているに違いない。

なお、制度論や計画では生態系をうまく組み立てられないという問題は、特にモンスーンの風土で顕著に現れるのではないかと思われる。沙漠の風土であれば統率重視の気風の下でそれなりにまとまるのであろうが、樹木の枝ですらくねっているモンスーンの風土ではなかなかそうはいかない。そういう視点で見ると、日本の都市の中で風土を大切にしたものは道路も家並みも人もいい按配にくねくねしている。モンスーンの下で生きるということは「くねくねとゆらぐ」ことである。沙漠の上で「くねくねとゆらぐ」と、オアシスにたどりつけずに意識朦朧となって死んでしまう。

## 5.「持続可能な都市再生」＝「まち育て」

ということで、「持続可能な都市再生」のためにはトップダウンではなくボトムアップが、「完成」ではなく「プロセス」が、大切である。その相違には、表面的な技術をはるかに超えた深い思想の相違があるように感じられる。それは、宗教改革を想起するような何かですらある。キリスト教がヨーロッパの森を切り開いたことや、古代日本において「常世の神」（蚕に似た虫）が「弾圧」されたことなどが想起されたりもする。「持続可能な都市再生」の本質の理解の仕方によっては、「第三の道」がイギリスで提唱され、それがドイツに波及したということも必然的なものとして理解できる。

いずれにしてもこれからは「まちづくり」の時代であるが、その「まちづくり」という言葉に対しても次のような見方がある。延藤安弘『おもろい町人』（太郎次郎社　エディタス、2006 年）によれば、「地域の人びとに、まちづくりってなんですかとたずねると、あれは行政がやるものでしょうという答えがさかんに返ってまいります」ということで、「人も育まれ、まちも育まれる、そういう思いをこめまして、ここに「まち育て」という言葉を使わせていただいております」ということである。この「まち育て」の意味に関しては延藤安弘が具体的に次のように述べている（日本建築学会意味のデザイン小委員会編著『対話による建築･まち育て』学芸出版社、2003 年）。

> 21 世紀は、人間疎外の克服、環境の育成、参加と分権化の社会システムづくりに向けて、市民･行政･企業間の創造的協働のムーブメントを多様に育む時代である。そうした時代背景のもとで、本書では「まち育て」としての「参加のデザイン」を提起している。「まち育て」とは市民･行政･企業の協働により環境（人工、自然、歴史、文化、産業、制度、情報など）の質を持続的に育み、それに関わる人間の意識･行動も育んでいくプロセスである。（中略）
>
> 「つくる」という言葉がともすれば、モノを効率的に標準的に製作するニュアンスをもつのに対して、「育てる」には慈しみ愛するココロを大切にするニュアンスがある。21 世紀は「対象」としてのハード･環境を作り直す「まちづくり」を越えて、人間も環境もぐるぐるめぐりあう、育みあう「関係」を豊かにする「まち育て」の時代である。

「まち育て」がこのようなものであるとするならば、「持続可能な都市再生」とはまさしく「ま

ち育て」である。そして、それは都市づくりの方法論の大転換を伴う。それに関して延藤安弘は同書で次のように指摘している。

「都市再生」の著者 R･B･グラッツは近著において“project planning”（専門家による計画）と“urban husbandry”（まち育て）を対比させる。プロジェクトプランニング（専門家による計画）を、統計データや客観的属性にもとづく立案であり、地域の諸資源を破壊していく空虚な空間を生み出す傾向が強いと批判している。それにひきかえ「まち育て」は、地域にあるタカラを発見し、それに活気を与え、諸資源の若返りと長持ちをもたらし、コミュニティの既存の力を増幅させるやり方であるとしている。「まち育て」による計画は、「専門家による計画」の地域資源軽視･破壊をこえて、市民･ユーザーの積み重ねられた諸経験や叡智を大いに活用することによって、地域の価値ある資源を再編･強化していく有機的なサステイナブル･コミュニティづくりであるとしている。

「育む」という感覚は図面どおりにできて完成という感覚とは全く異なるものであり、その感覚こそが「持続可能な都市再生」の本質でもある。忍耐強く皆でまちを守り育てる、という姿勢が「持続可能な都市再生」には必要不可欠である。そのような手法のひとつとして市民参加のワークショップなどがあるが、その「参加」とは、「そのプロセス全体の文脈の中で関わる人々が互いの生きる意欲を共に高めあう、あるいは、参加の経験の特定の文脈に依存する人間と人間、および、人間と空間の出会いがはらむ生きることと場所の価値の発見」という意味であると同書では述べられている。

**6. 人間の見直し**

これからの都市再生において大切なことは「育てる」ということであり、そのためには対象の全体像をとらえ、共に物語をし、共感することが必要になる。また、人間をありのままに見るということが必要になる。これは一種のルネサンスである。大雑把に言えば、「安全」、「快適」、「便利」という古典的な「教義」（コンセプト）を「持続可能な都市再生」の観点から組み替えることが必要になる。これは機能論の限界を打ち破ることである。それで思い出すのが、大谷幸夫と平良敬一の対談である（平良敬一編『「場所」の復権』建築資料研究社、2005 年）。

大谷　機能主義は、人間というものを寝るとか食事をするとか、主として機能で分解してしまったんですね。人間を機能で分解して、人間不在になってしまった。ところが一人の人間にとっては、自分の部屋でだらしなく食べたりしているのが一番おいしかったりするわけです。

平良　そう。コルビュジェがそれをいったときにはなかなかポエティックだったし、それほど機能分析的には感じないで複数の人間の行為として受け取ったはずなんだ。それが機能主義といったようなかたちで伝わっていくうちに、コルビュジェの観念とは違う方向にいってしまったという感じがありますね。

ユートピア市民が聞いたら激高するような、あるいはうらやむような話である。いずれにしても、これからは人間を、機能が集合した合理的で理性的な無機物としてではなく、いろいろなことが不条理に結び付いた「だらしな

い」有機物として見ることが大切になる。人間は必ずしも仕事をしてから食事をして、それから寝る存在ではない。全てを同時に行う存在でもある。あるいは何をやっているのかわからない存在でもある。こういう正しい現実をまずは見なければならない。今必要なのはそのような本当の人間の復興である。

こういう視点で都市を見ていけば見直すべきものは山ほどあるが、とりあえず今最も重要なのは機械や地下資源（つまりエネルギー浪費度が大きいもの）への依存度を低下させることである。エレベーター、エスカレーター、自動車、電車、地下鉄、高架施設、高層ビル等への依存度を低め、人間が楽に、自然に、自由に、「だらしなく」存在できる空間をつくることがこれからの「持続可能な都市再生」の基礎になる。

## 7. 全体の調和を考えない環境対策

「持続可能な都市再生」は、言うまでもなく、自然、社会、経済の各面における課題である。自然に関しては、地球環境などの問題がある。社会に関しては、人間関係の希薄化に伴う地域環境の荒廃（犯罪、バンダリズム、麻薬常習等の増加）の問題がある。経済に関しては、地域の人々が自立的に生活を営めなくなる経済連鎖の破壊という問題がある。いずれも、大量生産、大量消費で象徴されるような利便性の追求によって問題が大きくなってきたものである。そして、その根底には、人間不在という問題がある。人間は金を稼いで社会的地位を得てモノを買って旨いものが食えれば幸せになる存在ではない。

以上の問題をここでいちいち論じることはできないが、自然環境の問題については少し触れておきたい。本誌43号で「数多くの棚田ビル」を作ろうなどと書いたそのすぐ後に「というわけで、結局はテクニカルなツボにはまってしまった」と書いたが、要するにその意味は、そのような対策では「持続可能な都市再生」にならないということである。これは改めて説明する必要もないことだが、簡単に述べれば、人間が発生させた熱を植物の蒸散作用で低下させても、それは対症療法にしかならないということである。植物の蒸散作用では水が水蒸気になって（つまり液体が気体になって）、その際に気化熱が発生するのであるから、エントロピーは増大している。この世界を水や大気まで含めて全体で考えれば、人間が引き起こしている環境負荷を大きく低減しないまま、人間の外部の力に依存して自然に環境を良くするなどという都合のよい話はないように思われる。

ヒートアイランドで灼熱地獄になってしまった都心に植物をたくさん導入するというのは単なる対症療法であって、根本的な解決策にはならないであろう。これは、風の道をつくることに関しても同様である。それは熱をどこかに吹き飛ばすだけのことである。そんな対策では「持続可能な都市再生」は実現しない。風の道を確保したり緑地面積を大きくしたりするから高層化を進めても大丈夫だなどという考えが一部にはあるようだが、地球全体を見れば、そのような考えで「持続可能な都市再生」が実現できるわけがない。本当に「持続可能な都市再生」を実現するのであれば、超高層ビルの建設は厳に抑制し、今ある超高層ビルも必要性が薄れたものはない方がよいであろう。そもそも超高層ビルはつくるだけで莫大なエネルギーを使う。その維持管理運営においても同じである。

都心に大勢の人間を集めなければ経済活動ができないといった状況は既に相当緩和されてきているはずであるし、これからは

更に緩和されていく。仮にそうでなくとも、「持続可能な都市再生」を図るためには人口や経済活動の強力な分散策が必要である。今の大都市は、明らかに過剰な処理能力を都心に詰め込んでいる。パソコンを自作したことがある人ならわかると思うが、一般的に処理能力の高い CPU を組み込むほど発熱量が大きくなるため、ファンも強力なものを取り付けなければならない。都市で言えば、それが風の道であろう。CPU の処理速度に見合ったファンを付けないままパソコンを組み立てる人は普通ではない（何しろシステムの安全性に関わる極めて基礎的な事柄なのだから）。

もちろんこれからファンを大きくすればよいという発想では「持続可能な都市再生」は見えてこない。パッシブソーラーを「建築計画原論」とする見方も出てきているが、本当に高い処理能力が必要なのかということもあわせてバランスよく考えなければならない。新しい技術が開発されればそれで世の中が進化するというものでもないように思われる。常に全体の調和を考えることが必要である。この点に関しては『建築技術』2002 年 10 月号の「特集　パッシブってなんだろう」の中で建築家・岩村和夫が次のように指摘していることが参考になる。

当たり前のことだが「優れた住まい」とは、決して断熱化や気密化といった要素技術の単なる高度化や、安易な足し算によってできる訳ではない。寒冷地で大きな成果をみせた技術を温暖地に適用しようとするとき、私たちはその「場所性」に盲目であってはならない。まず土地の姿に目を向け、土地の声に耳を傾けるべきだ。今に伝わる住まいや暮らしの文化を知り、その知恵や工夫に学ぶべきだ。（中略）

入居後の観察や事後検証、そして住民とのコミュニケーションが不可欠である。私たちはそれを＜ポスト・デザイン＞の重要な作業と位置付け、昨年から大学の研究室を拠点として調査研究を実施している。入居者に実施したアンケートやグループインタビュー、実踏観察調査の結果からは、大半が満足している評価を得ている一方で、意図が伝わらず理解されていない計画や設計上の事柄がずいぶん多いことも明らかになった。そこから私たちが改めて学ぶことも多い。それらを改善するための住人・行政との持続的な交流は今後の課題である。（中略）

パッシブデザインとは、このようなバナキュラーな場所性や住み手と応答する住まいのデザイン全体のプロセスと営みを意味するものと考える。

（岩村和夫「バナキュラーデザインに学ぶこと　屋久島環境共生住宅のデザイン・プロセスから」）

このような取り組みの姿勢は、「持続可能な都市再生」を図る上でも必要不可欠のものであろう。

マイナスのエントロピー（ネガティブ・エントロピー＝「ネゲントロピー」）が存在しない以上、我々にできることはエントロピーの増大を抑制することである。これは技術だけの問題ではなく、自然、経済、社会のすべての面における我々の生き方の問題である。「持続可能な都市再生」を実現するためには、そこを考えることが重要である。時間効率を高めるのではなく、「ぐうたらする」ことが今求められている。我々はナマケモノの姿にもっと学ばなければならない。

## 8. ありのままを見るために

全体の調和を考えるということは、機能ではなく全体のありのままを見るということでもある。そのためには実践論ばかりでは不十分であり、芸術論の視点が必要になる。部分的な機能更新に視野が限定されてしまっては、もっと大きな今ある調和を破壊してしまうかもしれない。まずは過去のもの、今あるもの、人々の今の現実の生活を大切に扱わなければならない。固定的な計画のためにそれらを排除するのは、最も忌むべき行為である。現実をありのままによく見ることをしないばかりに壮大な無駄遣いが行われている、との指摘があることは今回の特集の中でも触れられている。自分の頭の中に出来上がってしまったコンセプトで問題を整理してしまうと、現実を誤認することにもなりかねない。「持続可能な都市再生」をめざす志があるのであれば、計画や制度をつくる前に十分な現実観察、分析がなされるはずである。失敗の本質に関する詳細な分析レポートも出てくるはずである。大切なのは、「コンセプト」の前に「現実」である。

と思ったところで何故かここに『ハイ・コンセプト』という本がある（ダニエル・ピンク著、大前研一訳、三笠書房、2006年）。実はこれがなかなか面白い。特に意義深いのは、これからは以下の 6 つのセンスが求められるという「コンセプト」である。

① 機能だけでなく「デザイン」
② 議論よりは「物語」
③ 個別よりも「全体の調和」
④ 論理ではなく「共感」
⑤ まじめだけでなく「遊び心」
⑥ モノよりも「生きがい」

これからの都市づくりにおいても極めて重要なセンスばかりである。これら 6 つセンスは、基本的には、都市計画という手法の枠組みの外にあるものであろう。したがって、これらのセンスを持つためには、やはり「まち育て」を都市づくりの中心に置いていくことが必要になる。同書には他にも興味深い指摘が多数掲載されているが、その中から以下にいくつか引用しておきたい。

国が豊かになり、人々が快適な生活を送れるようになるかどうかは、学校で芸術家を育てていけるかどうかにかかっている。

実用的なものが美しいというのは間違っている。美しいものこそ実用的なのだ。美しさは、よりよい生活や考えかたを私たちにもたらしてくれる。
（家具デザイナー、
アンリ・カステッリ・フェリエーソ）

観念的に言えば、人間は論理を理解するようにできていない。人間は物語を理解するようにできているのだ。
（認知科学者、ロジャー・C・シャンク）

人間に与えられた素晴らしい贈り物、それは共感する力を持っているということよ。
（女優、メリル・ストリープ）

## 9. アウトプットが都市を救う・・・

このように世の中には優れたコンセプトがあるわけだが、上記のコンセプトが重視する芸術、物語、共感はコンセプトを超えたところに生まれる。したがって、コンセプトの束縛からのがれることがやはり重要になる。そのための鍵は何か。それは、アウトプットであ

る。

インプットは、脳がする。だからインプットにはコンセプトが入り込む。あるいは、コンセプトがないとインプットにならない。一方、アウトプットにはコンセプトは入り込まない。アウトプットに血が混じっていたという話は聞くが、コンセプトが混じっていたという話は聞かない。それは、アウトプットは脳がするものではなく体がするものだからである。ここに、都市における自然の重要性がある。

ところが近代の人々は、特に都市の人々は、アウトプットを嫌う。それは、「進歩」「発展」「計画」「規制」などを掲げる近代人にとって、コンセプトで自由にならないものほど不愉快なものはないからである。自分たちのコンセプトに合わないものほど腹立たしいものはない。だから、都合よくコントロールできないものは隠してしまう。そこに人間疎外が生まれ、若者はニートになり大人はノートになる。かつての日本には「インテリは信用できない」という声が人々の間にあったとも言うが、信用できる人間になるための基礎としてそこにアウトプットがある。魂の前ではコンセプトが無力になる。

## 10. 江戸に見る都市経営

アウトプットをうまく処理した都市として自然に想起されるのが江戸のまちである。よく指摘されることであるが、江戸のまちは循環型の「持続可能な」都市であった。それは、動脈系と静脈系とがうまくつながっていたからである。なぜつながっていたのか。その要因をいくつか思いつくままに書き出してみよう。

① 地産地消
② 廃棄物（排泄物を含む）の有効利用
③ モノを大切にする精神（再利用等）
④ 自然を大切にする精神
（水などを汚さない精神）
⑤ 経済面での人々の有機的なつながり
（地域内経済循環、アウトプット処理）
⑥ 相互扶助
（モノやサービスの貸し借り、レンタルの精神、互酬の精神）
⑦ 住民主体のまちづくり
（お上に依存しない精神、役人が少なかった）
（実は町人が役人だったという説も）
⑧ 土地のつながりを大切にする精神
（地霊をうやまう心、仮初の縁を大切に思う心）

これらに共通する要因を一言で言えば、「貧しかったから」ということになるかもしれない。そうであるならば、今では人々が豊かになったから①～⑧の必要性が低下したと言える。そして、それでは環境が崩壊に向かうということに気づいて、「持続可能な都市再生」の主張や①～⑧を再び重視するまちづくりが出てきた、ということになる。基本的にはそういうことなのかもしれないが、しかしそれだけでは最近の「もったいない」の精神を十分に理解することはできないし、取り組みが長続きするとも思えない。そこには、自然環境制約以上の何かがあるのではなかろうか。また、そもそも江戸の①～⑧は本当に貧しさだけで説明できるのであろうか。

ということで、これからのまちづくりの方向を探る上で江戸を一度振り返って見ることが有益であるように思われるが、この点に関しては渡辺善次郎「江戸になぜゴミ問題がなかったのか？」（別冊宝島編集部編『江戸の真実』（宝島社文庫、2000 年）が江戸の「見

事なリサイクル・システム」を浮き彫りにしていて参考になるので、以下、同論文からいくつかの事例を引用したい。

はじめに古着の売買が「振袖火事」（1657年、明暦3年）に触れつつ述べられているが、当時は「かなりの大家の娘たちでも古着を買うのがごく普通だった」ということである。したがって、庶民は普段もっぱら古着を着ていた。その古着には破れて継ぎを当てたものもあったが、柄のちがう布で継ぎを当ててもおかしいとは思われなかったそうである。また、今日のように夏服、冬服の別も必ずしもなく、冬は単衣ものを合わせて綿を入れて着たという（夏には綿を抜いたので「わたぬき」と呼ばれた）。そして、改まった衣装が必要なときは借着を利用した。

衣類に関するこのような説明を読むだけで、いかに江戸にリサイクル精神、少ないモノの有効活用精神、レンタル精神が根付いていたかがわかる。衣類はまちの中で回して有効活用し、いよいよ利用できなくなったときは屑屋が買って浅草紙の原料にしたというから、資源利用の徹底振りがわかる。これは衣類だけではなく、布団、蚊帳、道具等に関しても同様であったらしい。自然と調和した江戸の美しい風景の背後には、資源を徹底的に大切にしてゴミを極力出さないリサイクルの精神、レンタルの精神があったわけである。大家の娘たちですら古着を買うのが普通だったというから、これは単に貧しかったからという事情で説明できるものではないであろう。そこには、古着を恥ずかしいと思わない精神があり、借着を恥ずかしいと思わない精神があり、それらの精神を顕在化させるためのシステム（損料屋、古道具屋、献残屋（不用品交換業）、修理屋、回収業、問屋等）があった。

このようにモノを何度も人の手を通して再利用する社会では、当然のことながら人々の間のつながりが強くなる。また、生業の幅も広くなり、貧しい人でもそれなりに生きていけるようになる。例えば道路に落ちている紙屑などを拾って生活する貧民も多かったという。それらはすき返されて「浅草紙」（業者が山谷に多かった）として再利用された。まちの中で金持ちも含めてモノをリサイクルしてまたそれを利用するようになると、それだけでまちの経済はよりよく回るわけであり、かつ、都市の自然環境も維持されるわけである。

そのような豊かな都市の精神があった江戸では、アウトプットも有効利用された。それは既に周知の事実なのでここではつぶさには述べないが、強調しておきたいのは、それが人も自然も保全したということである。例えば長屋の共同便所で生まれるアウトプットは大家の所有物になったが、大家はそれを農家に売却して幕末頃には年に 30〜40 両ほどの収入を得ていたという。それは大家が受け取る給金等より多かったらしいので、相当な金額である。だから、例えば店子が仮に家賃を滞納しても、100％の損失にはならない。どんなにお金が出ない人でもアウトプットは出てしまう。それには高い経済価値が付く。算数合戦などしない人間にも価値がある。これはひとつの人間復興である。

もっともこのような「クリーン」な江戸でも、利用できないゴミは水辺や空地によく捨てられたらしい。それで幕府もさまざまな対策を講じざるを得なくなったが、そのようなゴミの捨て場所として湿地が選ばれ、そこで新田開発が進んだと言うから、まったく無駄に投棄されたわけでもなかった。しかも、その処理費用は「芥銭」として町ごとに徴収されたということなので、ゴミの量をコントロールする

有効なシステムがまちに組み込まれていたということになる。これに関しては今野信雄『「江戸」を楽しむ』(朝日文庫、1994年)に次のように述べられている。

町方でもゴミ捨て場としてゴミ溜めを用意し、さらに数カ町が共同して設けた大ゴミ溜めにそれを集め、人足を雇って「突抜」から河岸へ運び、指定のゴミ舟に収集させるというシステムが完成しました。こうした人足の賃金は町自身の経費になるのですが、当時としてはこうしたシステムができたということは、かなり画期的だったようです。

(注)「突抜」 表通りから突き抜けている道で、荷揚げした荷物の運送路(今野前掲書から)

このようなゴミ・システムの形成はまちの自治を確立することにも寄与したであろうし、また、まちとまちとの間の関係を緊密にすることにも寄与したであろう。そして、それが美しい江戸のまちを維持する上でもおおいに役立ったに違いない。今野前掲書には、江戸開府数年後に訪れたスペイン人が「江戸の町はまだ誰も歩いていないようにきれいで清潔である」と驚いたこと、また、幕末の初代イギリス公使だったオルコックが「江戸の道筋はよく整備されており、あちこちに乞食がいることをのぞけば、汚物のために通行できないということはない。私がかつて訪れたアジアやヨーロッパの都市と、不思議ではあるが、実に気持ちのいい、いい対照をなしている」と述べたことが紹介されている。外国の都市との比較に関しては、渡辺前掲論文も次のように述べている。

廃棄物が少なく、発生したゴミも土地造成のために計画的に埋立てられた江戸は、きわめて清潔な都市であった。その清潔さは当時来日した欧米人を一様に驚嘆させた。

その頃の欧米都市は、いずれもゴミと汚物と悪臭でみちみちており、たえず伝染病の恐怖に脅かされていた。(中略)同じ頃、江戸の隅田川では、さかんに白魚漁が行なわれていた。「月も朧に白魚の篝も霞む春の夜」という歌舞伎の名台詞がいかにもふさわしい情景であった。隅田川は澄んでいた。白魚は水質汚染度 BOD3ppm 以下の清流にしか棲めない魚である。隅田川べりの春は、桜草つみや桜の花見にわき、夏は大山参りの水垢離とりや花火見物、夕涼みの舟でにぎわった。

という文章を読んだあとで今の東京を見ると、たった百数十年でこんなになってしまったことが嘘のようである。

さて、最近の各地のまちづくりにおいては、フリーマーケットやNPO等の活動により様々なモノがリサイクルされるようになってきた。また、地産地消の活動も活発になってきた。それらの中で特に興味深く思われるのは神奈川県茅ヶ崎市の市民活動グループ「ほっと茅ヶ崎準備室」の活動である。同組織では、「ほっと市」(フリーマーケット)、「茅ヶ崎リターナブルワイン」の開発・普及、「エコ・シティ茅ヶ崎マイ・バッグ推進会議」参加(不要になった傘からバッグを作る)、「茅ヶ崎サイクルライフ研究委員会」参加等を展開してきている。今後、「持続可能な都市再生」を全国的に展開するためには、このような活動を更に活性化していくことが肝要であるが、その際、上記のような江戸の取り組みがおおいに参考になるものと思われる。

最後に、上記⑦に関して江戸の公設民営方式を見ておきたい。近年では各地のまち

づくりにおいても公設民営方式による公共的施設の運営が行なわれるようになってきたが（例えば新潟県上越市の「市民プラザ」など）、「持続可能な都市再生」を実現する上で同方式は今後ますます必要性が高まっていくと思われるので、江戸のやり方もひとつの参考になるに違いない。これに関しては童門冬二『江戸の都市計画』（文春新書、1999年）に興味深い事例が紹介されている。

そのひとつは、隅田川に架かる永代橋の修復である。元禄時代に永代橋と新大橋の両方が同時に老朽化し、財政難の幕府としては利便性の高い新大橋を修復して永代橋を無くそうとしたところ、明暦の大火で橋がなかったために川に飛び込んで大勢が溺死した記憶がある深川地域等の住民が、「自分たちで修復するので所有権を移してほしい」と願い出た。これは今日で言えば市民が団体をつくって修理管理するということに相当するものであったらしい。それで市民グループが橋を引き取ったものの予想外に修理費がかかることが判明し、その後あれこれと知恵を絞って新しい方式（橋を通行止めにし、渡し舟を運営してその料金で橋を修理する、橋の減価償却のために「志のある通行人」に渡り賃を払ってもらう等）を考え出し、橋の修理が実現したとのことである。

もうひとつの例は、小石川療養所である。これは町医者小川笙船による目安箱への投書をもとに実現したもので、その投書の内容は、幕府が施設をつくってくれれば運営は自分たちでやるというものであった。その後、同療養所を拡充する際には「七分積立金」（町の入り用を節約してその 7 割を拠出するもの）を幕府が募り、市民もその趣旨におおいに賛同して多額の基金が形成され、それが明治政府にも引き継がれたとのことである。同書にはこれらの他にも興味深い事例が掲載されているが、今後のまちづくりにおいてもおおいに参考になりそうである。

## 11. ユートピア市民と江戸っ子

ここで、ユートピア市民と江戸っ子とを対比して表にしてみた。一部は想像で適当に埋めている。これを眺めていると、「持続可能な都市再生」の条件は何なのか、都市づくりの何をどう変えなければならないのか、といったようなことがわかってくるかもしれない。

**ユートピア市民と江戸っ子の比較**

| | ユートピア市民 | 江戸っ子 |
|---|---|---|
| 神様 | 天<br>（まちの外） | 地<br>（まちの内） |
| 生業 | 同質的<br>（奴隷除く） | お嬢様から<br>乞食まで |
| 性向 | 規律<br>効率<br>知<br>論理<br>報復 | 気儘<br>審美<br>情<br>共感<br>寛容 |
| 社会 | 集団<br>（組織統制） | 個人<br>（人と人） |
| 階層 | ツリー<br>（単線関係） | セミラティス<br>（複合関係） |
| 雑役 | 奴隷<br>（上下分離） | 町人<br>（上下連携） |
| アウトプット | 見えないふりして捨てる | 真っ直ぐ見て再利用 |
| 生活 | 不安なし | 不安あり |
| 娯楽 | 講義<br>算数合戦<br>戦争論<br>議論 | 花見<br>芝居見物<br>喧嘩<br>物語 |
| 園芸 | 義務 | 娯楽 |

| | | |
|---|---|---|
| 住居 | 定期的住替え | 自由 |
| 食住 | 分離 | 一体 |
| 時代 | 近代的 | 脱近代的 |

なお、江戸っ子が「気儘」というのは「ユートピア」や現代から見ればという意味である。これに関しては石川英輔『大江戸生活事情』（講談社文庫、1997 年）の次の記述が参考になる。

江戸時代は日曜がなかったから、人民は休むことなく働かされたと思っている人が多いようだが、どこかの国の神様が宇宙を作ってから休憩したのを記念して、国中が七日目ごとに休むという全体主義的な風習がなかっただけで、職人の場合など休みたい時に休んでいたのだ。日曜がなかったからといって、元旦以外はわき目もふらずに働いていたわけではない。（中略）

物を作る〈工〉の仕事でも、工場というほどのものはないから、大部分は個人的な作業だった。なまければ自分の収入が減るだけで、〈組織〉の利益には無関係だ。時間の制限もゆるやかだった。「紺屋のあさって」などという言葉があるように、職人仕事は約束の日限から多少遅れたところで誰も驚かないどころか、遅れる方が当たり前になっている職種さえあったのだ。（中略）

貧乏なら忙しかったのではないかと思う読者もおられるかもしれないが、けっしてそんなことはない。（中略）一部の特権階級が収奪したのなら、特権階級に富が集中していなくてはならないが、日本中のどこを探しても、ヴェルサイユ宮殿や北京の紫禁城のような集中した富の蓄積が見つからないではないか。日光の東照宮など、紫禁城と比べれば模型のような規模であり、日本中の労働価値を吸い取りはしないだろう。（中略）どう考えても、江戸時代の先祖たちは、きわめてのんびり働いていたとしか思えないのである。

**12. 天の神様･地の神様**

先の表では、ユートピアの神様は天に、江戸っ子の神様は地にいることになっている。あくまで推量である。本誌前号で述べたように、「コミュニティ」とは天の神様を中心とするヨーロッパの地域社会であり、ユートピアの地域社会もその一種と考えていいと思うが、天の神様を中心とする以上、その地域社会は地域社会をはるかに超えた原理で実は動いている。一方、江戸っ子の神様は「地霊」である。その身近な例は、今でも街中でよく見かけるお稲荷さんやお地蔵さんなどである。その地霊の力がとても強かったことは宮田登『江戸の小さな神々』（青土社、1989 年）が紹介する次の逸話でよくわかる。

田無市の芝久保5丁目にあるトウカメの稲荷（中略）は、明治 39 年にこの場所から田無神社へ移された。ちょうど明治政府が強行した神社合祀政策の一環であり、この地域の小祠はいずれも田無神社へ集められてしまった。しかし、（中略）昭和 12 年か 13 年の暮のある夜更け、社殿近くの工場で火事が起こった。高張提灯をかかげた消防団員が工場の方へ走り寄っていくのと反対の方向に、小さな灯が物音もたてず次々と去って行くのが見えた。（中略）そして、（中略）結局元の土地に社殿が再建されることになった（中略）。やはり特定の土地に帰属している地主神＝稲荷の存在は、他地域と同様なのであった。この場合、神社合祀を行う国家権力が、土地に帰属する霊力を超えることができなかったことを如実に物語っていることになる。

江戸っ子は特定の土地に住む際には、まずもってその土地の地霊の許しを請うたと言われているが、今でも土地を利用するときは地鎮祭で地霊の許しを請う。天の神に祈るわけではない。許しを請う内容は以下のようなものである。

地べたにも地霊がいる。だから建物を建てるときは地鎮祭をやって、雨や風や太陽を奪うお詫びをする。(市橋貴『ゴミの始末書 都市生活の生理学』リサイクル文化社、1993年)

日本人のこのような心情は太古から続くとても強いものであるらしく、次のような嘆きも聞こえてくる。

現在の東京の土地が、維新以来のもっとも大きな変動に見舞われていることに気づく。ちょうどそれは、実家の犠牲になって身売りを余儀なくされている娘のように哀れである。(中略) 土地を、身売りする娘にたとえるのは不謹慎だといわれるかもしれない。しかし実際には幸せな土地、薄幸な土地、売れない土地というのはあるものである。その奥にひそむものを私は地霊だと考えたいのである。(鈴木博之『東京の〔地霊〕』文春文庫、1998年)

こういうことで、西洋の神様と日本の神様とは御座しますところが随分違うのであるが、その違いは都市づくりの手法にも決定的な差を及ぼすはずである。それに関しては、中沢新一『アースダイバー』(講談社、2005年)の次の指摘が参考になる。

最初のコンピューターが、一神教の世界でつくられたというのは、けっして偶然ではない。一神教の神様は、この宇宙をプログラマーのようにして創造した。ここに空を、あそこには土地を、そのむこうには海を配置して、そこに魚や鳥や陸上動物たちを適当な比率で生息させていくという、自分の頭の中にあった計画を、実行にうつしたのがこの神様であった。神様でさえこういうコンピューター・プログラマーのイメージを持っているのであるから、その世界を生きてきた人間たちが神様のようになろうとしたときに、最初に思いついたのが、コンピューターを発明することだったのは、ちっとも不思議ではない。

ところが、アメリカ先住民の戦士やサムライの祖先を生んできた、環太平洋を生きてきた人間たちは、世界の創造をそんなふうには考えてこなかった。プログラマーは世界を創造するのに手を汚さない。ところが私たちの世界では、世界を創造した神様も動物も、みんな自分の手を汚し、体中ずぶぬれになって、ようやくこの世界をつくりあげたのだ。頭の中に描いた世界を現実化するのが、一神教のスマートなやり方だとすると、からだごと宇宙の底に潜っていき、そこでつかんだなにかとても大切なものを材料にして、粘土をこねるようにしてこの世界をつくるという、かっこうの悪いやり方を選んだのが、私たちの世界だった。

近代都市計画が前者、すなわち西洋の一神教的世界観が生んだものだとするならば、「待ち育て」はこの国の風土に根差した後者になるのであろう。すると、これからは「環太平洋」の時代になるのかもしれない。あるいは、グローバリゼーションの時代であるから、何らかの新しい関係が創造されるのかもしれない。

**13. いろいろなカミサマ**

神様に関して少し補足すると、江戸の神様は必ずしも地の神様ばかりではない。例えば富士山などの山岳信仰があった。これは天と地との中間に位置するようなものであるが、これに関しては徳川幕府が仏教を強制したことの反動であるとの指摘もあり、やや逃避的なニュアンスがある。また、西洋のコミュニティの神様が大昔には日本にもいたような気がする。本誌前号で少し述べた内容を踏まえると、「コミュニティ」は漢字で「神結」と表記できる。それを「コミユン」と読めばそれはそのまま「コミューン」であり「コミュニティ」である。

「神結」とは何か。ここが難しいところである。古事記に「カムムスヒノカミ」という神様が出てくる。天と地とが初めて分かれたときに高天原に出現した（成った）三柱の一で、アメノミナカヌシノカミ、タカミムスヒノカミに続いて出現している。これらの神様は名前が役割を示しており、アメノミナカヌシノカミは天の中心となる神様、タカミムスヒノカミは天上界の創造神である。それで順序からするとカムムスヒノカミは地上界の創造神ということになるのであるが、なぜそうなるのかは事情に疎い筆者にはよくわからない。古事記の神様には「成る」神様と「産まれる」神様がいるようで、産まれる神様の方は地上界に生まれるのでそういうことになるのかもしれない。そのようなことを前提にすると、地上界を創造する神様であるカムムスヒノカミは要するにコミュニティの神様なのである。なお、古事記では「神産巣日神」と表記されているが、「神結」と書いても同じであろう。

ということで日本の地域社会はそもそもコミュニティとして生まれたのである、と言うとどうも少し違うらしい。国作りは大国主神がやったわけであるが、その際にカムムスヒノカミが何かしたとは書かれていない。ただカムムスヒノカミの子のスクナビコナノカミが少し手伝ったと書いてあるだけである。どうやら天の神は自ら手を汚さず、手を汚すのは地の神であるという原則がここでも成立しているらしい。古事記では、もともとは天の神のものである地上世界を地の神が整えてから天の神が支配するという構図になっている。なお、天の神の子であるスクナビコナノカミが手を汚すのは次のような事情による。

> 故（かれ、大国主神のこと）ここに神産巣日の御祖命に白し上げたまへば、答へ告りたまひしく、「こは實に和が子ぞ。子の中に、我が手俣より漏きし子ぞ。故、汝葦原色許男命と兄弟となりて、その国を作り堅めよ。」とにりたまひき。（倉野憲司校注『古事記』岩波文庫、1963 年）

要するに、たまたま地上に落っこちてしまったのである。それで、「それより、大穴牟遅と少名毘古那と、二柱の神相並ばして、この国を作り堅めたまひき。然て後は、その少名毘古那神は、常世国に渡りましき」（同）となる。結局、完成してお終い、というのが天の神のパターンである。

ということで、日本で地域社会に根付いていたのは大昔から本来は地の神であったということになる。これは縄文時代からの伝統なのであろう。出雲系の神様を祭っている神社がなぜか東国に多いと言われるのもそのような伝統と関係があるのかもしれない。

「神結」が出たついでなので関係がありそうでなさそうな話をすると、江戸には「髪結」があった。鈴木理生『大江戸の正体』（三省堂、2004 年）によれば、この「髪結」は町役人

の一種であったという。いったい何の役を果たしていたのかと言えば、「毎日町内の町人各階層の成人男性全員の月代を剃ることで人別と人数の確認「役」を果たしていた」ということである。これは一種の監視役であろう。「髪」の字にはそこから広がるという意味があり、「神」の字にはそこから伸びるという意味がある。どちらも大元を抑えている。どちらも「カミサマ」だが「カミサン」と読む人もいる。そのような存在は「ユートピア」の背後にも感じられる。しかしさすがにそれはトマス・モアもはっきりとは書いていない。

**14. 江戸の自然**

ユートピアの娯楽が算数合戦であり戦争論であるというのは今の小学生や大人のようであるが、それに比べれば江戸っ子の娯楽は都市の娯楽としては極めて健全であった。中でも花見などは都市の精神を正常に保つためにとても重要な役割を果たしたのではないかと思われる。娯楽の時間まで算数合戦をやっているようでは、世界はコンセプトで固まってしまう。我々はもっと自然を大切にしなければならない。

ということで、ここで少し自然を愛でるという江戸の健全な娯楽を見てみると、今野前掲書には「貧乏な江戸っ子たちでも花見だけは欠かせない年中行事」とあり、花見の名所が江戸の各地にできたことが示されている。また、花は桜ばかりではなく、2 月の梅、3 月の桃などもあった。花以外では、秋の紅葉、月見、虫の音、冬の雪見など、自然を愛でる行楽が実に豊かであった。

このように江戸っ子が余暇に算数合戦などをせずに自然の中に出た背景には、家が狭いという事情もあったが、自然が豊かという事情もあった。江戸の自然がいかに豊かであったかを知る貴重な資料に、1824 年に出版された『武江産物志』がある。著者は岩村常正という人で、下町生まれの幕臣である。そしてそれを丸ごと収録して解説した野村圭佑『江戸の自然誌』（どうぶつ社、2002 年）がある。以下、同書により江戸の自然を少し見ていきたい。

『武江産物誌』は、「江戸とその周囲、日本橋から 20 キロメートル程度の範囲を対象として、そこに産する産物、すなわち農産物、薬草木類を主とし、魚介類、昆虫、爬虫類、両生類、哺乳類なども加えて書き上げ、さらには行楽のガイドブックをも兼ねている」ものであり、要するに江戸のどこにいつ行けばどのような動植物が見られるかが総覧できる大変便利な本である。例えば桜などは上野山王社前、同清水観音堂後、同山門の前、同大仏堂前、堂慈眼堂、同寒松院、同護国院、同谷中門清水門内寺院、同車坂、・・・と大変詳しい。虫類はスズムシが外桜田、あすか山、おそない村、マツムシが流山辺、道灌山、などとなっている。獣類は馬が小金、鎌ヶ谷、牛が車うし（高輪）、狐が道灌山、狸が中野、イタチが深川、リスが上野、などとこちらは動くものだけに大雑把である。

それにしても自然をこれだけ堪能できる都市というのは実に健全な都市である。西洋の都市などではおよそ考えられないであろう。それだけ豊かだった自然はいつ消えてしまったのであろうか。同書には次のように書かれている。

> 戦後まもないころは、荒川、隅田川でシラウオがとれ、東京のすぐ軒先の湾内では潮干狩りや海草の養殖も行なわれていた。東京の中心からはやや後退したものの、江戸時代の自然と本質的に違いがない東京の

自然は、まだ周辺にとどまっていた。周辺の農村には大きな変化はなく、生き物は周辺からも供給されていたからである。

いつごろからどんな生き物が東京の各地から消えたのかの調査がある。『都市の自然史』（品田穣著・中央公論社）によれば、生き物の種類によってその時期は異なるが、おおむね昭和 35（1960）年あたりから、急激に少なくなり、昭和 40 年ごろには、東京の周辺部からも身近な生き物が一斉に姿を消したという。

ここ 40 年あまりの間に自然が急激に消滅したのだとするならば、これは都市づくりの評価の根幹に関わる大問題である。

**15. エネルギー効率の問題**

さて、先の表をもう一度見ていただきたい。ユートピアと江戸とを比較した場合、どちらが住みよい社会であろうか。多分、多くの人は江戸と答えるに違いない。それでは、どちらが効率的な社会であろうか。多くの人はユートピアと答えるに違いない。ここに近代人の限界がある。都市再生に関しても、一生懸命に汗を流して生きがいを持って元気に活動できるような都市に再生しなければならない、などと言う人がいる。「ぐうたらできるような都市に再生すべきだ」などと言う人はいない。これが大問題である。

効率性の意味を「一定時間内の仕事の量を多くする」という意味でとらえれば、近代人の考え方になってしまう。その観点からするならば、ユートピアは効率的である。皆が集まって勤勉に働き、余暇の時間も算数合戦をする。庭いじりも競争でする。だから経済が繁栄し、「ご馳走の後にはきまって美しい意匠をこらした菓子だの糖菓だのがでる」という生活になる。そういう社会が効率的だというのは、多くの経済学者の考え方である。

それでは、効率性を「仕事」そのものの効率性でとらえたらどうなるか。これは、物理学者の考え方である。その観点で考えれば、ユートピアほど非効率な社会はない。効率的に働かせるために皆を一箇所に集める。食事をさせるためにも皆を集める。「会館」なるものをたくさん建設する。まずはここで非常に大きな非効率が発生している。大きな建築物を建設、維持管理するのに莫大なエネルギーを要している（超高層ビルの建設）。また、人々が住宅と職場、食堂との間を移動するのにも莫大なエネルギーを要している（大量輸送機関の整備）。さらに、人々を均一に能率よく働かせるために監視をすることが必要になり、それにも莫大なエネルギーが必要となっている（ネット監視、監視カメラ）。人々の均一性を維持するために住宅ですら 10 年に 1 度住み替えさせるというのであるから、これも大変な非効率である（不動産の流動化）。それに加えて、余暇の時間に講義や算数合戦や戦争論などに参加させる（学習塾、ワイドショー）。これらは、上記のような「効率的」な社会をさらに「効率的」にする上では「効率的」なのであろうが、もっと広い視野で考えれば大変に非効率的である。まず、人間が健全でいられなくなる。人間にとても大きなストレスがかかる。そして、ユートピアでは、それに耐えきれなくなった人間は奴隷にされてしまう。『ユートピア』には次のように書いてある。

奴隷にするのは彼ら自身の同胞で兇悪な犯罪を犯したため自由を剥奪された者か、他国の都市では重い罪科の為に死刑の宣告を受けた者かに限られている。特に後者

はその数も多いが、その大半は、時にはごく僅かな代価で買われてくることもあるが、大体は無償で買われてくる。この種の奴隷は年中無休で労役に使われるばかりでなく、足枷まではめさせられている。しかしもう一方の奴隷、すなわち同国人の奴隷の方は、その待遇はもっと残酷である。ユートピア人によれば、この連中はもともと立派な国に生れ、敬虔な雰囲気の中に真実な人間となるよう育てられて来たのである。それなのにずるずると悪の誘惑に引きずり込まれたということは、全く度しがたい人間というほかなく、苛酷な刑に充分値するというのである。

「もともと立派な国に生れ、敬虔な雰囲気の中に真実な人間となるよう育てられて来た」にも関わらず、「ずるずると悪の誘惑に引きずり込まれた」人間は「全く度しがたい人間」であり、「苛酷な刑」に充分値する、という非寛容な考え方からするならば、「兇悪な犯罪」という中身は相当に幅広いものであろう。「ぐうたら」したら、それは「兇悪な犯罪」であり、即奴隷である。「真実な人間」は、問題は社会構造にあるなどとは夢にも思わない。

最近の日本ではホームレス、ニート、生活保護世帯などが増えており、「格差問題」が大問題になっている。その背景には、当たり前だが、社会構造の問題がある。したがって、参加の機会を与えることはもちろん大切だが、社会構造を抜本的に変えるという療法が必要不可欠である。そのためにも、「ぐうたら」できる社会の意義を再認識しなければならない。ホームレスになったのは自己責任だ、などと考える人はまさしく「真実な人間」である。

無駄なエネルギー（これには人間も入る）が発生していることを考慮しないで「効率性」を論じているところにまずは非常に大きな問題がある。要するに、エネルギーロスの問題が視野に入っていない。ユートピアの「効率的」な活動の背後では莫大なエネルギーロスが生じている。そして、言うまでもなく、それに対しても外部から何らかの形でエネルギーが補填されている。そこに今日の地球環境問題に連なる問題がある。だから、「持続可能な都市再生」の最も基本的な課題は、モノをリサイクルしたり都市をコンパクトにするような表面的なものではなく（もちろんそれらも大切だが）、人間を再生することである。

この課題を少し学術的に述べれば、「持続可能な都市再生」とは、ラザール・カルノー（フランスの物理学者、1796～1832）が考え出した「カルノー機関」（無限にゆっくりピストンを動かす機関）の方向へ都市を向かわせることである。すなわち、「再生」のプロセスを「準静的過程」に準ずるプロセスと捉えることである。それは、都市づくりの方向を「ユートピア」の方向から江戸の方向へ大転換させることである。もちろんこれは方向だけの話ではあるが。

**16. イタリアのまちづくり**

さて、ユートピアと江戸との比較は大変興味深いものではあるが、さすがにどちらも現在の日本の都市からはやや距離がある。そこで、もう少し身近なまちづくりで参考になるものがないかと探してみたところ、イタリアのまちづくりがある。なぜイタリアなのか。

日本のまちづくりの現場では暫く前からイタリアが注目されている。イタリアの人間味あふれるまちの形やまちづくりの精神を採り入れようという動きが各地で見られ、イタリア語の名前を冠した地区や施設（広場、建物等）が目立つようになってきた。一例として、東京

都港区の汐留再開発の中の「コムーネ汐留」（シオサイト 5 区）が掲げている「商業振興計画」の一節を引用する。

イタリアにおける都市の発展の特徴は、職人企業や中小商工業者の発展とともに進み、この層の活力が都心を活性化していった点にある。政策的選択よりも都市における「市場の原理」、「質的競争」がこの仕組みの推進力であったと考えられ、イタリアはこの推進力が発揮される中で、その文化や歴史を継承しながら、従来の地縁型地域社会から、人や情報が常に流動化し、新しい時代に適するよう常にイノベーションを繰り替えす、より機能的な都心商工業者の新しい機能型地域社会に変化していった。

それにしても、なぜ今イタリアなのか。それは、イタリアでは日本が目下直面している問題と同じような問題に数十年前に直面し、その際に都市づくりの方向をうまく転換させることができたためであるらしい。陣内秀信『イタリア　小さなまちの底力』（講談社＋α文庫、2006 年）には次のように記述されている。

今でこそ小さなまちが元気なイタリアだが、この国でも実は、「大きいことはいいことだ」という発想が、1970 年頃まではやはり強かった。戦後、日本より少し早く50年代、60年代に高度成長を経験したイタリアでは、発展の条件をもつ力のある都市はどこも、郊外へ住宅地、ニュータウンを広げ、大きく成長をとげていた。だが、70 年代に入ると、経済の動き、社会の真のニーズを察知し、イタリアの中北部の諸都市は、拡大・成長を抑える方向に都市政策を大きく転換させた。

この政策転換の方向に関しては民岡順朗『「絵になる」まちをつくる』（日本放送出版協会・生活人新書、2005 年）に次のように記述されている。

イタリアでは 1960 年代以降、都心部の空洞化と少子高齢化により、都市が衰退期を迎えた。（中略）このようなとき、日本の都市計画の常識では、都心部の容積率を上げて大規模な再開発が採られる。つまり「規制緩和」による都市再生だ。（中略）しかし、イタリアではまったく反対の方法を採用した。まず都心部にチェントロ・ストリコのエリアを指定し、次いで、そこでの建設行為や開発を厳しく規制したのである。（中略）その結果、都心部全体の歴史的・美的・文化的価値が上昇する。（中略）

もうひとつのポイントは、「郊外部に対しても開発抑制をかけた」ことである。（中略）イタリアの都市計画は、郊外部の開発を禁じたのである。いきおい、不動産資本が向かうのは、都心の老朽建造物を修復・再生することで生まれる利益であった。（中略）不動産資本は、古くて老朽化した建物を、より高級な住宅として、あるいは付加価値のあるオフィスとして「再資本化」し、利潤を得ようとし始めたのである。また、都心の容積率が抑えられたために、限られた床面積の価格は相対的に上昇した。

こうして、1970 年代を境に都心への再投資が起こり、「修復・再生」工事が活発化して、歴史的都心部の再生が進んだ結果、《質の高い空間を必要な量だけ備えたコンパクトなまちづくりに成功》したのである。

陣内前掲書によれば、このような政策を「理論的、かつ象徴的に実現」させたのがボローニャだという。ボローニャは 1970 年代に発想を大きく転換させて郊外への拡大を抑

制し、都心の保存･再生に乗り出した。「市民生活の核」になるよう、「アイデンティティ（独自性）をもった質の高い都市と地域の環境づくり」をめざしたとのことである。それにより、「ヒューマン･スケール（人間の身体寸法）の都市を維持し、資本や大企業から住民の手に都心を取り戻すことができた」。ボローニャ市は「保存は革命である」とのスローガンを掲げているそうである。このボローニャのまちづくりに関しては、星野まりこ『ボローニャの大実験　都市を創る市民力』（講談社、2006年）に次のように紹介されている。

ボローニャは 2 つの大きな問題を抱えていた。都心部の空洞化、そして、世界を席巻するアメリカ型の大資本･大企業への対抗策である。ボローニャはまず空洞化した都心を庶民の手に取り戻すことから着手した。郊外の開発より中心部の再生を選択し、その資金を都心に取り残されたスラム化した低所得者層住宅の再生に充てた。（中略）「都心庶民住宅地区再生事業」は低所得者層を都心部にとどめるだけでなく、都心の文化価値を再認識させることに一役買った。郊外へ流出した人々の U ターン、そして地元産業や職人企業の都心回帰は経済効果を生み、都心は多様な年代･階層･職種の人々で再び活気を取り戻し、24 時間賑わいのある場となった。この低所得者住宅の再生による都心部活性化のシステムは「ボローニャ方式」と呼ばれ、都市再生のモデルとして世界中の都市計画者の注目するところとなった。

同書によれば、ボローニャは「自主独立･自由の精神を尊重する街」であり、1228 年にはヨーロッパ初の奴隷解放法である「天国の掟」を施行したそうである。また、「地区評議会」という住民主体の組織が上記の都市再生を支えた。これに関しては同書は次のように紹介している。

1956 年、人口 4 万ほどの区（クアルティエレ）ごとに評議会（コンシーリオ）が設置され、行政に地域住民が直接参加するシステムを築いた。（中略）地区内の建設に関する決定権や小学校、保育所の公共施設の運営、公共事業の実施などの権限が与えられた。（中略）更に都市計画･住宅行政など、市の都市整備計画に意思表示できる審議権が地区評議会に与えられた。チェントロの再生はこのようなプロセスの下に決定されたものである。

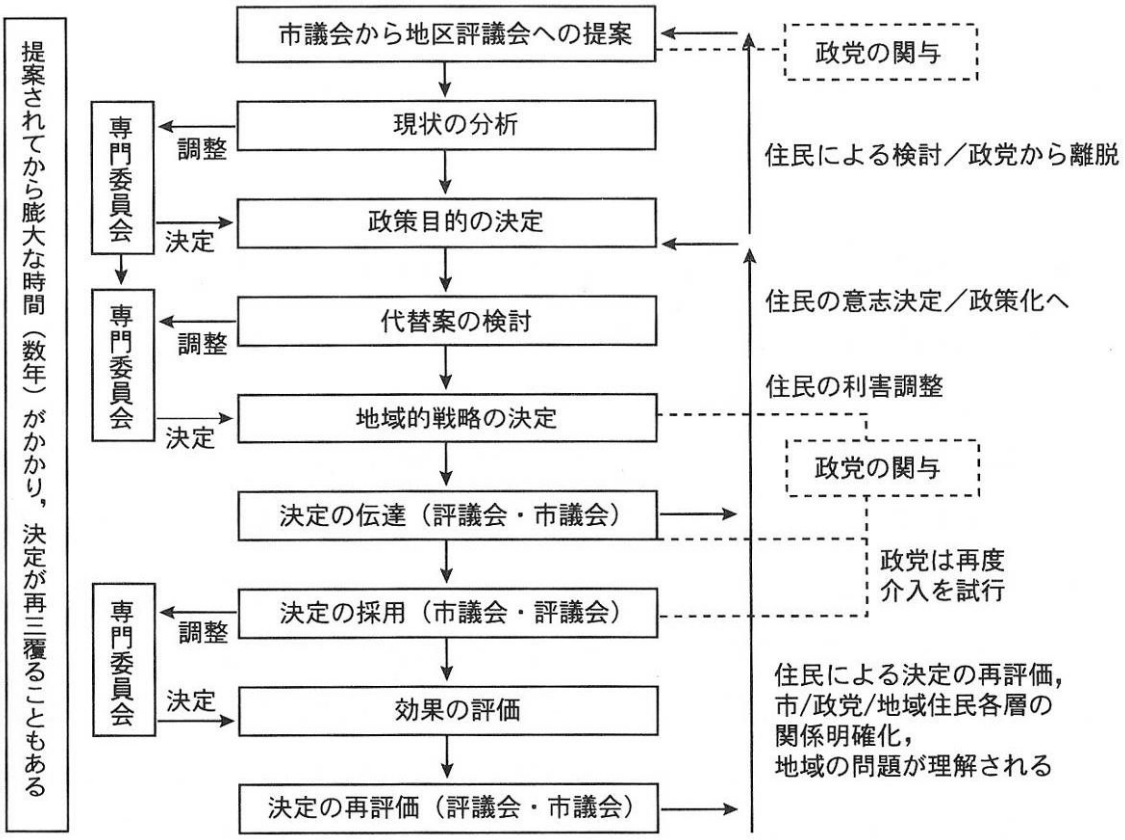
この地区評議会のシステムに関しては宗田好史『にぎわいを呼ぶ　イタリアのまちづくり』（学芸出版社、2000 年）に次図のようにわかりやすく図示されている。

なお、地区評議会のシステムは最近では地区住民の関心の低下など様々な問題を持つようになっていることが前二書のほか梅原浩次郎『イタリアの社会と自治体の挑戦』（かもがわ出版、2006 年）に示されている。

## 17. 持続可能な都市再生のための公共政策の課題

以上で見たように、ストックの有効活用、都心部における住宅の充実、及び住民主体のまちづくりシステム（組織）の構築をボローニャにおけるまちづくりの特徴の一部として掲げることができるが、これらは「持続可能な都市再生」にとっても極めて重要な要素であることが今回の特集の中でも示されている。また、少し別の観点から見れば、ボローニャの都市再生は、

地区評議会による段階的意思決定の流れ（専門委員会の段階的検討と合意形成）




（出典）　宗田好史『にぎわいを呼ぶ　イタリアのまちづくり』（学芸出版社、2000 年）

① チェントロ・ストリコの再生や低所得者住宅の充実に見るように、大規模な開発・再開発によるのではなくむしろ開発の抑制、伝統や文化の見直し、福祉の充実によるものであること

② 地区評議会の設置・活動に見るように、都市再生を分野横断的に総合的に扱っていること

が特徴的である。このような 2 つの特徴が「持続可能な都市再生」の基本的特徴でもあることは、諸富徹「サステイナブル社会と公共政策」（（社）大阪自治体問題研究所編『サステイナブル社会と公共政策』自治体研究社、2006 年）が次のように指摘するところである。

「持続可能性」や「サステイナビリティ」がキーワードとなり、それが環境、経済、社会を統合した発展のあり方を指すようになったのは、比較的最近のことである。公共政策を論じる上で、これらの新しい理論動向には次の 2 つの特徴がみられる。第 1 に、これまでは環境や文化、あるいは福祉は相互に関連することなく、それぞれの領域で個別に公共政策のあり方が論じられてきた。つまり、環境、文化、福祉といった要素が相互に無関係に論じられてきたのがこれまでの特徴だとすれば、現在は、環境と福祉、あるいは

文化と福祉を総合的に捉えて新しい社会のあり方を論じようとする点に新しさがある。

第 2 に、先進国社会で環境、文化、福祉といった要素の社会に占める位置が大きくなるにつれて、環境や福祉に対する投資の強化がむしろ経済発展を促し、さらには、新しい社会発展のあり方を切り開くことを、説得的に明らかにしようとする理論的試みが目立ちつつある。

このような問題意識から、同論文は「サステイナブル社会を構築するために、環境、福祉、文化に対してこれまでよりも大きな投資を行なうことが、経済を刺激し、雇用の増加にもつながること、また、サステイナブル社会の重要な要素である経済の持続可能性を満たすためには、EU のように、人的資本や社会関係資本に対する投資を進め、公共投資に依存しない、自律的な経済システムを構築する必要があること」を論じているのであるが、特に興味深いのは後者であり、これに関しては次のように述べられている。

サステイナブル社会を構築するためには、物的な意味での資本だけでなく、非物質的な意味での資本蓄積も促す必要がある。社会関係資本は、サステイナブル社会を実現する上で、重要な貢献を果たす可能性がある。我々の社会を支える制度がうまく機能するかどうかは、それを支える基盤となっている社会関係資本が十分に蓄積しているかどうかに大きく依拠している。環境、福祉、文化に関連する NGO、NPO などの自発的結社が叢生し、様々な活動が行われ、多くの市民がそこに参加して相互に学習し、自らもサステイナブル社会の担い手になっていこうとする社会と、そういうことの全くみられない社会とでは、おそらく公共投資の有効性は全く異なってくるであろう。

このようにこれから重要になってくる社会関係資本の特徴は、以下のように整理されている。

第 1 に、(中略) この投資の無形性は、公共投資政策のあり方をこれまでよりも難しいものにするだろう。というのは、ストック水準の向上のために、どのような投資をどれだけすればよいのかという公共政策上の目標を、明確な形で定義づけることが困難になると予想されるからである。第 2 に、社会関係資本への投資主体は、政府の手から離れて市民社会へと移行することになるだろう。政府は、社会関係資本の定義からいって、その投資主体になることはできない。なぜなら、社会関係資本はあくまでも市民同士の相互作用の中から育まれてくるものであり、その役割を政府が代替することはできないからである。したがって、社会関係資本の蓄積に関しては、政府は投資主体としての役割から手を引き、むしろ NGO や NPO のコーディネイターとしての役割を強めることになるだろう。

このように、「持続的な都市再生」において最も基礎的な資源となる「社会関係資本」の持続的な蓄積を図るためには、①目標を明示する都市計画よりも都市運営を重視すること、及び、②都市づくりをトップダウンで行うのではなく、ボトムアップでまちの人々が自ら行っていくこと、が必要になる。それを十分に認識すれば、「持続的な都市再生」は「まち育て」になる。

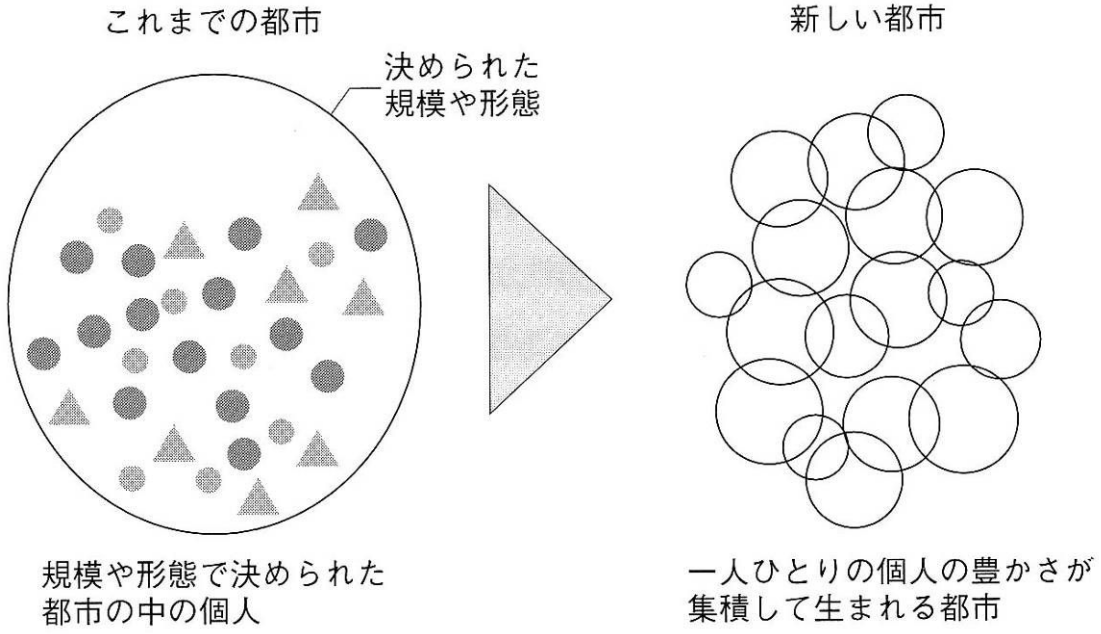
**18. トップダウンからボトムアップへ**

まちづくりを「まち育て」としてトップダウン

ではなくボトムアップで行うということは、すなわち都市づくりの手法の大転換を意味する。この点に関しては、タイセイ総合研究所＋細内信孝『テーマコミュニティの森　ヒューマンサイズの新しい都市』（ぎょうせい、2002 年）が次のように指摘している。

環境の時代にどのような社会を形成するかを考えたときに大切なのは、個人の価値観や資質である。それはこれまでの都市を規模や形態からとらえる都市計画的な考えとは明らかに異なり、一人ひとりが、地球環境や身近な環境に対してどのように接し、そのなかでどのように生きていくのかを考えるアプローチである。（中略）その個人の豊かさから都市づくりをとらえ直すことが可能な社会が必要である。（中略）すなわち、このような環境に配慮した個人やその個人の豊かさから地域を再構築していくことが、持続的でエコロジカルな都市を創造することにつながるのである。

**都市と個人の関係の再定義**




（出典：タイセイ総合研究所＋細内信孝『テーマコミュニティの森　ヒューマンサイズの新しい都市』ぎょうせい、2002 年）

アプローチのこのような転換を図るための有効な手法のひとつに「ワークショップ」がある。これはすでに全国各地のまちづくりで幅広く取り入れられてきており、優れた実績をあげるものも出てきている。そして、このワークショップの方式は近代的都市整備手法をさらに高度化させるものではなく、それを転換させるものとなりつつある。その転換のイメージをつかむための面白い例が中西紹一編著『ワークショップ　偶然をデザインする技術』（宣伝会議、2006 年）に掲載されている。それは、映画『踊る大捜査線　THE MOVIE2 レインボーブリッジを封鎖せよ！』の中の「真矢みき演じる沖田警視正」の手法

と「柳葉敏郎演じる室井管理官」の手法との対比である。前者は「事件は会議室で起きている」などという価値観で頭の中のコンセプトに基づいてトップダウンで事件を解決しようとして失敗して解任され、その後を受けた後者が次のように言う。

捜査を立て直す。被疑者はこの辺の地理に詳しい。地図にない所に隠れているはずだ。地図に書かれていない箇所を教えてくれ。（中略）捜査員に関わらず、役職や階級も忘れてくれ。

「地図に書かれていない箇所」を重視する姿勢は都市づくり手法の大転換の必要性を示し、また、「役職や階級も忘れてくれ」という言葉はボトムアップの重要性を示している。

**ワークショップを通じて設計された市民施設の例（熊本県水俣市「総合もやい直しセンター」）**

これからは図面を重視することよりも、土地の上で上・下の区別なく皆が自ら「手を汚す」やり方が大切になる。この点に関しては、曽根幸一『都市デザインノオト』（建築技術、2005 年）に次のように記述されている。

都市計画という用語の定義にしたところで、今や用途地域図とか都市基本図などと呼ばれてきたものが、どれだけ有効性を発揮しているのか、はなはだ疑わしくなっている状況にあるらしい。（中略）たとえば、私たちも都内のある区の計画に参画してきたが、基本図とか、総合計画図とか、区のもつべき理念などといった話よりも、これが細分化された

部分にどんな問題が潜んでいるかを抽出するほうに、はるかにエネルギーをかけるようになっている。一つの区といえども、38 ヶ所にものぼる生活圏をくくり、地図を片手に踏査しながら、住環境や公共施設や、公害の苦情、歩行者の環境、災害危険の有無などについて、しらみつぶしにしていくのは気の遠くなる作業であるが、どうやら、これなくしては、魅力的な街づくりなどといってみたところで、何の手掛かりもつかめないことだけは、しだいにはっきりとしてきた。（中略）場当たり的といわれようが、手をこまねいて天災の来るのを待つような理想型の計画では、街づくりなどほど遠い。そんな姿勢が随所にみうけられるようになった。統一でも、総合でもない、地区のあちこちに発生する良質な断片が、やがてはこの街全体の質を向上していけばそれでいいというのである。（中略）

実は、こうした方法の転換こそが、われわれの分野においても、容易にはとらえにくいが、ある大きな意識の変貌につながっているという気がしてならない。（中略）たとえば 10 数年前、（中略）都市の計画なり設計なりには、ある種のイズムが支配していた。（中略）だが、先の計画や設計の方法の違いのように、こうした考えはすっかり影をひそめてしまったといってもいい。（中略）イズムというものを拒否して、すこぶる動的に対処するようになったともいえる。

もちろん都市計画がもはや不要ということではないであろうが、その今後のあり方に関しては蓑原敬『成熟のための都市再生』（学芸出版社、2003 年）に次のように記述されている。

日本の法定都市計画はその歴史的な経緯から言って、国際的に通用する本来の都市計画とは言い難い。本来の都市計画は、街をどう開発し維持し管理するかという素朴で包括的な問題に対して、物理的、空間的な意味での解答を与えることなのだが、日本では、（中略）都市計画法制の主要な課題が「スプロール対策」「用途の純化」に過ぎなかったことを銘記しておくべきである。（中略）今後の都市計画は、（中略）先ず、暮らし全体の改善に目を配ることが必要になってくる。福祉的な観点から交通との関連で住宅立地、病院立地を考えたり、人を引きつけ、引き寄せるために賑わいのある街環境を用意したり、（中略）「暮らし街づくり計画」になる必要がある。

**19. もうひとつのアウトプット**

上で見たワークショップは人々を有機的に結び付ける有効な手法であるが、文字どおり人々を有機的に結び付けるものがアウトプットである。それは先に見たとおりであるが、今ここに何故かもうひとつのアウトプットがある。

というところで某市のまちづくりを思い出した。その市ではゴミを20以上にも分別して回収している。そのため新しく引っ越してきた人などは最初のうちは戸惑ってしまい、ゴミの脇で悩むことになる。そして古くから住んでいる人を交えて「ゴミ端会議」が始まり、人々の交流が活発になる。市当局の見解によれば、そこで生まれるのが「ゴミュニケーション」である。

ゴミュニケーションとは何か。その定義は市当局の文書には示されていないが、想像することは容易である。それは、ゴミを囲んで地域住民が意思疎通することである。縄文の感性は器の下の炎を顕在化（ボトムアップ）させ、弥生の感性はそれを地の中に埋設（トップダウン）するものであるから、ゴミュ

ニケーションとは縄文の遺伝子に由来する何か深遠なものであるかもしれない。それは、宗教的に見れば「ゴミ送り」であり、社会的に見れば世界をトータルに見なければならない地球環境時代の「まち育て」である。そしてそこで生まれるのが「ゴミュニティ」である。

ゴミュニティとはゴミを中心とするものである。ある社会のゴミは他の社会でもおおむねゴミである。そのゴミを囲む社会は真ん中のない多中心の社会である。そこに社会の包容力が生まれる。地の思想、静脈系、アウトプットの重要性はそういうところにある。我々はコンセプトでつながらないということはあってもゴミでつながらないということはない。出したゴミはいつかまた我々のところに返ってくる。ゴミは御美であり美しい都市をつくるための基礎でもある。ゴミの語源は「チリコミ（散込）」の「散」が散じた言葉であるらしいが、コミュニティは「込＋結ぶ」でもあるから、ゴミとコミとは親密な関係にあるのかもしれない。

ということで我々は「ゴミュニティ」をこれから形成していかなければならない。それで「都市のゴミに関する研究」に燃えてみることも重要である、などと思う今日は「燃えないゴミの日」なのであった。

## 20.「持続可能な都市再生」の基礎の基礎

最後にどうしても気になることがある。それは、あれだけ勉強熱心なユートピア市民が、なぜ真の意味での社会の非効率性を認識しないのであろうか、ということである。余暇の時間に戦争論などやらずに社会論、環境論などをやる市民はいないのであろうか。しかし、考えてみれば、「ユートピア」は「度しがたい人間」に対する「苛酷な刑」がある社会である。

このように考えてくると、「持続可能な都市再生」を実現するために最も大切なことは何かが見えてくる。例えば、物事を客観的に見るための有効な方法論に「自分の立場を棚に上げる」があるが、それに「苛酷な刑」が適用されると、「棚の奥に封じ込める」（村八分など）や「棚から引きずり下ろす」（冤罪を着せるなど）などが出てくる。まちづくりの現場からは「四面楚歌だった」、「村八分にされ続けた」などという話も聞こえてくる。まちづくりNPO の活動が妨害されている、草の根的まちづくりがトップダウン型まちづくりに逆戻りしそうになっている、地元の人々が蚊帳の外に置かれている、などの話もある。実際はどうなのか。真実よりも身近な利害を優先するようでは「持続可能な都市再生」は望むべくもない。利害のために真実から目を逸らすことの罪の重さを教育の場でも徹底的に教えること、これが「持続可能な都市再生」の基礎の基礎であろう。

## おわりに

以上は「持続可能な都市再生」というテーマに沿いつつ、西津研究理事及び久繁研究員執筆の本論が出来上がった後の数日間に、直感のままに走り書き的に書き流したひとつの試論であり序論であるから、思わぬ誤解や正解があるかもしれない。「持続可能な都市再生」と本論との間にいくつかの点で関係が確認できたと思われるが、時間をかけて考えればさらに様々な視点が出てくるに違いない。今号が全体として何か新たな視点を見出すことに少しでも寄与することができれば望外の幸せである。